

中国ブルーベリー産業と日本ブルーベリー産業との交流事例

－遼寧省を中心として

宇都宮大学 国際学研究科

国際社会学科 李 震

1 なぜブルーベリー交流事例を選んだのか

日中交流は長い歴史を持ち、中国の漢朝から日中の中で貿易などの交流がすでに始まった。唐朝の遣唐使が最も有名である。今政府同士は表面上で緊張関係に見える一方、民間からみると、貿易、交流などは以前よりも多くなってきた。いわゆる政冷経熱な状態になっている。

今、日本では労働力の不足問題がかなり深刻な問題になっている。特に農村人口の中に若い後継者たちは技術と経験が少ないため、効率的に生産できない問題は深刻になっている。これからの中国も日本のような問題をでてくる。日本をはじめ、中国も協力して、その解決方法を見つけ出すのがかなり重要である。それを解決するための方法いろいろあって、交流はその中で最も重要な手段であると思う。

私の研究テーマは農業政策下の中国地域農業の現状及び発展（遼寧省農業事業訪問を事例）である。国際交流、訪問、農業発展を通じて、日中両国の農業労働力不足問題、高齢化問題をある程度に解決できる方法を見つけ出すというのは研究目的の一つである。今は中国遼寧省農業科学院（遼寧省政府に直属する機関）の代表として、日本に駐在している。交流、訪問、情報などを通じて、中国の農業現状を改善するとともに、日本の労働力不足問題を解決できる方法を見つけ出したい。仕事には農業全般のことがメインで、その他の業界も扱っている。遼寧省でブルーベリー産業が始まったのが近年であり、健康食品の中で最も歓迎されたものである。今遼寧省の中では、大面積栽培が始った。最初は政府直営の農場と企業がやっており、近年農家でもやり始まった。

ブルーベリーも農産業の一つの分野で、今回は中国遼寧省のブルーベリー産業と日本ブルーベリー産業との交流事例を中心に、政府からどんな政策が出されたか、日中両国にどんな利益があるかを明らかにする。事例はブルーベリー協会副会長鈴木太美雄副会長の訪中を取り扱う。この事例をはじめ、農産業はどんな欠点があるのか、これからどういう政策出したら国民にとって有利なのかについて検討する。

2 遼寧省のブルーベリー業界の特徴

まず、遼寧省のブルーベリー業界について、丹東、大連が最も有名な栽培地である。なぜなら、土壌が適しているからである。ブルーベリーは栄養が高く、近年に中国の遼寧省では盛んな健康食品の一つである。主に、ジャム、生食、ジュース、ワインなどの生産で利用されている。

2012年4月のデータによると、遼寧省丹東市のブルーベリー面積は1000ヘクタール（15畝で1ヘクタールの換算）に達し、年産量は1億トン以上もあり、中国の中でもトップ

クラスになっている¹。ブルーベリーは今中国にある果物中で高価なものであり、普通の国民は食べられないため、政府からブルーベリー産業に対して、より有利な政策を出した。市によって、特定の政策もある。例を一つ挙げると、大連の庄河ではブルーベリー栽培業者に道を作り、規模によって、支援金を出しているという政策がある。

3 ブルーベリー概要

(1)ブルーベリーはどんなものか

ブルーベリーとは成木の樹高は1.5-3m。春に白色の花を咲かせ、花後に0.5-1.5cmほどの青紫色の子果実になる²。栄養価値がかなり高く、中国の遼寧省では盛んな健康食品の一つである。

(2)ブルーベリーの歴史・品種・将来像

ブルーベリーの発祥国はアメリカである。果実は古くから利用され、特に色素含有量が多いので健康食品として評価されている。近年、果皮に含まれるアントシアニン色素が人間の眼の疲れを速やかに癒すとして注目される。フランスとスイスではブルーベリーで作ったジャムが最高級品といわれている³。世界各国で栽培されているブルーベリーは、ハイブッシュブルーベリーとラビットアイブルーベリーの二種類である。そのハイブッシュの中には北ハイブッシュと南ハイブッシュと分けてある。遼寧省で適しているのは北ハイブッシュであり、その中にすでに普及された品種はアーリーブルー、ダロウ、ブルーレイが代表的である。

日本はアジアで最も早い栽培している国で、1915年にアメリカから導入した。栽培普及したのは1976年である。中国では近年初めており、2001年は青島で初めて栽培成功した。全国各地に普及しつつである。遼寧省は近年ブルーベリー産業が盛んである。ブルーベリー協会副会長の鈴木氏が訪中の間に、各市に視察中で、今、遼寧省にはブルーベリーにかなり力がいれているとわかった。また、鈴木氏の技術指導と講義によって、ブルーベリーをはじめとする農産物の現状をある程度に改善できると思う。もちろん遼寧省ではなく、いろいろな省市も交流をやっており、近い将来にはブルーベリーは果物の中で1位になる可能性がある。

4 ブルーベリー協会と中国遼寧省の交流

(1)第一回訪中交流⁴

まず遼寧省農業科学院について簡単に説明する。遼寧省農業科学院というのは遼寧省

¹遼寧省新聞 HP 丹東蓝莓领军全国 种植面积达1.5万亩 2013年7月現在
<http://www.ln.chinanews.com/html/2012-04-19/474207.html>

²日本ブルーベリー協会編 「家庭果樹ブルーベリー」創森社 2000年
第一章ブルーベリーの素顔と果樹特性 14ページ

³日本ブルーベリー協会編 「ブルーベリー全書」創森社 2000年
第四章 世界のブルーベリー栽培の動向 110-113ページ

⁴遼寧省農業職業技術学院 校内新聞に簡単に載っている。2013年5月10日
<http://www.lnzy.ln.cn/>

政府に直属する機関であり、遼寧省の中の地位は日本の農林水産省みたいな部門である。22の研究所（センター）があり、50余りの研究分野で、職員（公務員）が1680名で、その中、技術職（公務員でありながら、技術専門家）が830名、高級技術職（公務員でありながら高級技術専門家）が296名、同時に、「遼寧農業科学」などの8種類の学術刊行物を出版している。遼寧省農業科学院は創立以来、研究成果を1156も取得した。賞をもらった成果は891であり、400億元余りの社会利益を獲得した。遼寧省の発展にも寄与している⁵。

第一回訪中交流は鈴木副会長2012年5月に当院（遼寧省農業科学院）の要請を受けて、中国遼寧省で2週間ほど訪問した。その間に、当院の本部で会談と果樹研究所で雑談会を行い、瀋陽・丹東・營口・大連の庄河、金州にある当院の研究所と農産業へ技術指導を行った。当院から顧問を授与した。

雑談会の内容は主にブルーベリーの品種、栽培、剪定技術、各地域（土壌）への適性などについて、展開した。まず、鈴木氏から日本のブルーベリーの現状（栽培面積、土壌などについて）が述べた。次にブルーベリーの品種はノーザンハイブッシュ（寒いところに適している）、サザンハイブッシュ（暖かい地方に適している）、ラビットアイ（暖かい地方に適している）と大きく3種類ある。その3種類について日本での分布状況を紹介した。

また、「日本のブルーベリーは専門やっている方はほとんどいない・副業としてやっている人が多い」と述べたが、技術員たちは日本のブルーベリーを副業としてやっていることが多いと初めて聞いた。中国ではほとんど専門業者でやっていると言った鈴木氏に伝えた。鈴木氏から土壌の適性からみる中国はかなり適しており、日本ではあまり適していないという説明があった。適していないのに、そこまでできたことが技術者たちからの尊敬を得られた。その次にブルーベリーの栽培方法・剪定技術について、指導しながら、技術者たちからも質問が出た。最後には、遼寧省で適している品種の紹介とその品種の特性について述べた。

以上は第一回訪中の雑談会の経緯である。その他に各地域の農産業施設への指導を行い、講義もした。

(2)第二回訪中交流⁶

第二次訪中は今年の3月に遼寧省營口市にある国立大学「遼寧省農業職業技術学院」の要請を受けて、3日間の訪問交流をした。この大学は観光と学習と同時にできる学校を作っていくという理念で、校内の景色もよくて、農作物に成熟した季節になると、食べ放題などの企画もある。

最初の一日は院長、副院長たちと一緒に学校内にある台湾の会社と共同につくった胡蝶蘭ハウスを考察し、校内の農業施設と加工施設にもいろいろと見学したうえで、学校側にいろいろなアドバイスをした。

二日目はブルーベリーについての報告会を行い、参加者300人以上である。その中

⁵遼寧省農業科学院 HP <http://www.laas.cn/>及びパンフレットから纏めてきた。

⁶遼寧省農業科学院 HP <http://www.laas.cn/> 去年まで載ったが、今年で取り下げた。

で教授が半分と学生半分となる。報告会で、ブルーベリーの品種、土壌への特性、栽培方法、剪定の技術について、3時間に渡って、講義し、学生たちからの質問も受け入れた。講義をうける学生たちはまだブルーベリーがよく分からなくて、鈴木氏から説明をうけた。日本の円玉を出して、ブルーベリーの各品種の大きさについて紹介した。また、学生たちが日本での実習に関わる現地条件および実習内容についても簡単に説明した。

三日目はハウスの中でブルーベリーの剪定技術の伝授が行い、果樹に関わる教授たちがほぼ全員が出席した。鈴木先生がブルーベリーの特性、剪定方法などを説明しながら、実現指導した。また鈴木先生が茨城にある組合の会長をやっており、今年7月にこの大学の4,5人ぐらいの実習生を受け入れることを学校側と合意した。大学から客員教授も授与された。また学校側から、鈴木先生へ研究室と研究用地を出し、共同に研究するという話もでてきた。

5 ブルーベリーから農業全体を見る

第一回の訪中は主にブルーベリー産業をメインとして、遼寧省農業関連のトップの責任者との雑談会により、雑談会双方にとっても、有利な条件を作り出した。この雑談会はブルーベリーをはじめ、農業全般の内容に関わる雑談会である。日中友好にも役に立つとも言える。鈴木先生の指導、講座により、遼寧省のブルーベリー栽培が今より一層に発展できると信じる。第二回の交流は主に学校でのブルーベリーの指導、講義を通じて、学校とブルーベリー組合が利益を得ることだけではなく、学生たちにも学生時代からブルーベリーの栽培に興味を持たせることができる。

ブルーベリー交流は単に交流だけではなく、人々の繋がりによって、日中両国の関係にも影響を与える。民間の関係さえよければ、国同士の間にくら問題があっても、解決する橋渡しになる。ブルーベリーをはじめとする農業のいろいろな分野にも海外とお互いに先進なものを学習し、自国のレベルを上げると同時に、良好な国際間の関係にも寄与する。

政府は農産業への支援と政策をもっとたくさん出すべきである。具体的には以下のような課題事例がある。遼寧省普通農家の蓋州市帰州鎮関猛さん、39歳、家族5人、(両親、妻、長男)、ハウスで桃20R、露地桃2R、露地ブドウ25Rであり、政府の政策により、農業関連税金全額免除、高速道路料全額免除、市場販売税も全額免除になったが、収穫の時期になると、午後から収穫して、100キロ以上離れる市町村まで運んで、販売している。特に天気が悪い日、安くても売れない。中国では農業組合、農協のような組織が少ないため、個人販売時にいろいろ問題があった、市場の不良購売業者から苛められて、安く購入されて、高く転売している。

解決策としては政府から支援金をある程度を出して、日本の農業組合のようなものをつくれば、より効率的に販売できるし、農民たちの利益も守れると思う。また、日本の技術と先進な農作物を中国へ伝わって、中国の労働力を日本へ派遣するのもいい手段であると思う。

6 鈴木氏の活動と中国との関わり

鈴木氏の活動と中国との関わりについて以下のようなやり取りで行った。

2013年3月に鈴木氏へのインタビュー

Q1：中国にどんなイメージをもっているのか？

A：中国に来る前に違和感があって、どんな目にあうのか分からなくて、実際に現地へ訪問するとその違和感がなくなりますね。

Q2：中国はブルーベリーの生産、栽培に適しているか？

A：土壌からみるとかなり適していて、労働力の面から見ても安いコストで雇えて、かなり有利ですね。

Q3：適している品種は？具体的には？

A：北のほうですから、ノーザンハイブッシュが適していますね。具体的にいうとタロウ、デューク、アーリーブルー、ハイランド、スパータンなどが適している。

Q4：中国でブルーベリーをやりたいのか？

A：やりたいね！中国で土地がいっぱいあるし、それに労働力が安く、中国で大きな農園を作って、中国だけではなく、世界へ輸出もできる。

Q5：まだ中国にきたいのか？

A：来たいね、こちらでの長期指導でも Ok

やはり人は未知な場所に違和感があって、実際に行ったら、たいしたことがないと感じる人が多いと思う。人生の中で、いろいろなことをチャンレンジするのが大事なことであり、いい人生経験もなる。まだ、現地の人と触れ合いで、知らないことを耳にしたり、先進な技術を学んだり、過去から今までの歩みなどを参照して、自分の短所か将来意識を見つけ出すのは一生にも役に立つものになると思う。

7 結論及び解決策

こういうような深く交流を通して、日本技術を中国へ伝わって、中国の人力を日本へ貸し、お互いに利益を得たうえで、日中友好もさらに深めると思う。また、今回の交流を通じて、日中両国のブルーベリー産業の繋がりもよくなり、中国の技術不足を解決すると同時に、日本での労働力不足問題もある程度緩和できる。それで、合作の中から高齢化と労働力不足を解決できる方法を見つけ出すのがこれから課題になると思う。政府から農業に従事している方々にいい政策を出すべきである。今まで交流という方法を挙げた。また、農業をやっている方に支援金をだしたり、農業に従事する楽しさを教えたり、それに地域ごとに模範になる農業をやっている方に賞を出すという手段もあると思う。